

家庭血圧計の利便性とその測定値の信頼性について

小田崇弘 川名千尋 得竹陽一郎 波越朋也
中川真美 本間文博 山本亜希

【目的】

家庭血圧測定は再現性、予後予測能が高く、測定が容易であることから、高血圧診療には不可欠なものとなっている。今回、高血圧患者群と健常群（学生）の家庭血圧値を比較し、患者群の家庭血圧の特徴を検討した。

【方法】

対象者は高血圧にて外来通院中の患者（患者群）25名（65-75歳；平均年齢71歳、男性10名、女性15名）、および学生（健常群）7名（男性4名、女性3名）。家庭血圧を1週間、朝起床後1時間以内と眠前に測定。両群の血圧値を比較検討した。

【結果】

- 家庭血圧値の全平均は患者群： $132 \pm 15 / 78 \pm 8$ mmHg、健常群： $115 \pm 5 / 74 \pm 11$ mmHgであった。
- 曜日別の家庭血圧値を比較したが、両群ともに収縮期および拡張期血圧に曜日による有意な違いは認めなかった。
- 朝夜の収縮期および拡張期血圧、心拍数を比較すると、患者群では明らかに朝の収縮期および拡張期血圧が夜に比し高値であり、また心拍数が低値であった。健常群では血圧、心拍数に朝夜の違いは認められなかった。
- 平均収縮期血圧に対する朝夜の血圧値の差を検討したところ、患者群において平均収縮期血圧の上昇にともない朝夜の血圧値の差の増加を認めた。
- 自己申告による血圧値と、血圧計に記録された血圧値の比較では、22名中8名が一致率60%未満であったが、その違いは3mmHg以内が多く、どちらの血圧値が高いかについては一定の傾向は得られなかった。

【結論】

高血圧診療において、家庭血圧は朝の高血圧を評価可能であり、その利便性は高いと考えられた。しかし、高齢者における家庭血圧測定の信頼性を考慮すると記録式血圧計での測定が望まれた。